

編集者を経て、タイポグラフィの国際コンペである「東京TDC賞」を26年に渡り運営する照沼太佳子氏。情報のデザインを担う基礎であるタイポグラフィに対し強い拘りと高い意識を持ち、後進に伝えている。

編集者からキュレーターへ

編集を通じてデザインにアプローチ

私のキャリアは編集から始まっています。かつてはアートや文化を取り扱う総合誌の編集に携わっていました。デザインはもともと専門ではありません。長年編集をしている中で、日比野克彦さんなど、デザインのワールドからアートと繋がる人が出てきた時期にその活動に賛同し、それらをサポートする仕事をしたいと思い、雑誌という紙面から展覧会という空間を扱うメディアに変えました。

それ以降は商業施設で展覧会を開催するプロデュースを専門にしました。そのころは西武百貨店やPARCOが色々な展覧会を開催していた時代です。海外の非常にユニークなアーティストの作品もさかんに発信していました。

その活動の中で、扱うものが雑誌でも空間でも、編集という考え方は変わらないということに気づいて、こ

TDC賞の理念

国内外のデザインハブへ

TDC賞が直接的な対象としているのはタイポグラフィにかかわるデザインです。一見、狭い範囲に思われませんが、情報発信における全てに関係しているので、グラフィックデザインでもっとも重要なスキルと言われます。しかも、それに広い視野で実験精神も持ち合わせ、より高い志で取り組んでもらいたい。海外のタイポグラフィを相対的に評価するということもそれと繋がっています。若い人にも色々なデザインを見たらうことで、目の経験がさらに洗練されたデザインを作っていきます。やはり国内外を含めて多くのデザインを見なければデザインの良し悪しというのは分かりません。その一方でもう一つの柱と

れまで培ってきた編集力を活かすというのをテーマにしています。

1987年に東京タイプディレクターズクラブを設立する時に、展覧会のサポートをしてほしいとお声がけいいただきました。90年からは国際コンペティション「東京TDC賞・The Tokyo TDC Annual Awards」を毎年開催し、事務局長として賞の方向性などを含めてキュレーションしてきました。10年前にはみなし法人からNPO法人となり、ようやく組織として多くの方に運営にかかわっていただき色々な決定ができるようになりました。その中で日本のデザインを海外で紹介したり、逆に海外のものを日本のデザイナーに紹介したりして学んでもらっています。特に海外とのネットワーク作りに注力しています。

して「タイポグラフィック」、文字の視覚表現の追求を活動主旨にあげてきました。アジアには欧米にはない「文字学」というものが存在します。文字そのものをグラフィックデザインの文脈において鑑賞の対象物としてみる、または民族というルーツでグラフィックデザインをみていく試みです。

同時にTDC賞は新しい才能の発掘を大事にしています。タイポグラフィは実験性も強いジャンルなので、若い人のトライアルも積極的に評価します。若い人がそれをきっかけに社会の中で繋がりを見つけるチャンスを得るということがこの国際コンペの意義であり、活動継続のエネルギーです。グラフィックデザインの領域では、日本は世界の中で独自のポジションにあります。またアジアの中では、デ



照沼 太佳子

Takako TERUNUMA

東京タイプディレクターズクラブ
キュレーター

tdctokyo.org/jpn/

東京TDC賞では毎年2000点が日本から、1000点が海外から、計3000点の応募があります。それを26年毎年開催しているので、相当数のデザインを見てきました。発足当時は日本でもポスターのみを扱っていた国際コンペはあったのですが、グラフィックデザインに関するカテゴリ全てを包摂しているものはありませんでした。だから参考になるものは海外の同様のコンペしかなかったのです。しかし逆に何も前例を知らないのが強みだと思いい、独自のやり方を模索し今に至ります。その中でデザイナーたちが何を問題としているのか、日本のデザイナーとの差異や、世界を視野に入れた時に日本のデザイナーが強化していかなければならないものを感じており、その気づきを活動の中でも大事にしています。

デザイナーの層がとにかく厚く、アジアを牽引していると見られています。香港のデザイナーの皆さんに、日本は産業との切磋琢磨の中で独自のデザインを確立してきたと指摘されたほです。分かりやすい例でいえば国際会議などで韓国や台湾などのリーダーにお会いすると、その代表作がご自身の個展のために制作されたポスター作品などであることが多い。しかし彼らが尊敬する日本のグラフィックデザイナーは、社会に機能しているデザインにおいて質の高さを実現していて素晴らしいと言うのです。なるほどそうなのかと認識を新たにしました。しかし一方で、関西の地下鉄に初めて乗ったNYのデザイナーから電話をいただいたこともありました。「デザイン年鑑には世界のトップクラ

■てるぬま たかこ プロフィール

東京タイプディレクターズクラブ 事務局長
東京工芸大学芸術学部デザイン学科 教授

略歴・活動歴

編集プロダクション「エンジンルーム」、アートやデザインの展覧会企画制作会社「H'action」を経て、1991年より個人事務所、Accompany Co.,Ltdにおいて活動。デザインの様々なイベントやシンポジウムなどの企画、コーディネート、キュレーション、編集などを行なう。Close-up of Japan in Sao Paulo — Nipponjin 展(サンパウロ美術館)、「ACTIVE WIRE 展」(ソウル Art Sonje Center)、「Work from Tokyo展」(ブルノ グラフィックデザインビエンナーレ)など、国内外のグラフィックデザイン展のキュレーション&コーディネーション多数。編集実績に長野冬季オリンピック開閉会式プログラム、CD-ROM「マンガラ・コスモロジー」(マルチメディアグランプリ・パッケージ部門[教育・教養賞])など。前田ジョン「One Line Project」に参加。

現在は活動の中心を、1987年に設立された東京タイプディレクターズクラブ(浅葉克己代表)におき、事務局運営、国際デザインコンペティション「東京TDC賞・The Tokyo TDC Annual Awards」のキュレーション、2003年よりスタートしたサタデー・スクール「希望塾」の企画運営などを行なう。国内外でのグラフィックデザインに関する展覧会開催多数。主に文化的側面からデザインに関わり、さまざまな世代のグラフィックデザイナーたちと日々喜びや苦悩を共にしている。2003年開催「世界グラフィックデザイン会議 名古屋」の企画委員として企画・講師コーディネート・編集制作などを担当。

文字の質は情報の質、情報の質は文化の質
タイポグラフィの国際コンペを担ってきた26年



- 1 Active Wire展(2000年ソウル・Art Sonje Center)アンダー30の日韓合同展。受注構造の商業デザインだけでなく、後にライブストリーミングサイト&スタジオを立ち上げた宇川直宏氏や、自主出版などの活動を行なっているデザイナーをキュレーション。
- 2 東京TDC賞の成果を披露するTDC展。ギンザ・グラフィック・ギャラリー(egg)、関西は京都dddギャラリーで開催。昨年はイギリスの大手新聞2紙の専用書体のリニューアルが同時に賞を受賞した。
- 3 『The Best in International Typography & Design Vol.26』東京TDC賞の入選作品を掲載し出版しているデザイン年鑑(DNP アートコミュニケーションズ刊)。

スのデザインがずらりと並ぶのに、街の中は相当ひどい。このギャップは何なんだ」と大変な剣幕でした。

市井に溢れるデザインがもたらしたもの

亀倉雄策先生たちの時代はタイポグラフィを大事にされていましたが、長い時間の中で自社の発信を自社で全て管理するという文化がなおざりになってきた側面もあります。有名な事務所でもアルファベットの文字組みが頓珍漢ということもつい数年前までは珍しくありませんでした。中にはそれが逆に方言のような味わいだという人も居ますが、せめて基本は抑えておかないといけません。TDCは海外の審査員をお呼びし、ラテンアルファベットに関する講演やワークショップを開催していますが、若いグラフィックデザイナーだけでなく、たとえば電化製品のインターフェイスデザインを管理する企業人などにも好評です。

かつては印刷物はある程度のスキルや専門性のある人でないと作れなかったのが最低限のレベルが保たれていたのではないのでしょうか。今やグラフィックデザイナーは極端な言い方をすれば名刺さえ作れば明日からで

も誰でもなれてしまいます。PCが台頭してきたからは、誰でもパソコンさえあれば、ポスターや告知文を作ることが出来ます。それが至る所に散乱しているのが皆さんの目がそれに慣らされてしまっています。教育の現場の問題にも繋がります。身近な公共施設に行けば象徴的に分かりますが、キャンペーンの告知も列への並び方を指定する張り紙も同レベルに渾然一体となり、気ままに作られているのです。海外に荷物を送るときは送付状況がみずばらしく、郵便局のEMSが使えません。意識の高いプロの間ではタイポグラフィをきちんと学ぼうという人も居るのですが、格差が広がっているのが状況です。

文字に対する意識の高まり

だからこそ、プロの何たるかを示さなければならぬという厳しい声も聞こえます。この状況に対して東京TDCが貢献できることは、前述したワークショップなどを通しての啓蒙や、また時には書体をデザインする人を称えて正当な評価の機会を作ることなどです。アジアや中国のデザイナーには日本のデザイナーを羨ましがっている人がいます。それは書体の選択が幅広いからなのです。アジアの中では

フォントを作っても労働が大変な割にはリターンが少ないのでやりたがる人が居ない。なにしろ日本語の場合だと9000種類ぐらいの文字を作らなければいけないので非常に大変な作業です。にもかかわらず日本には美しいフォントが選択肢豊かに用意されているので、それを国が主導で国策として行っていると思っている人も居るぐらいです。日本では本当に書体に対する愛を持っている人が、小さい会社ながらも頑張っているという文化があり、アジアの中では報われています。ですから良い物を作ってくれている人達を称え、TDC賞を贈り、彼らに対する感謝をしています。

最近は資生堂だけでなく、たとえばソニーなども日本語の専用書体を持ち、情報の質に関する意識が高まってきました。今は文字を大事にしようという若い人も出てきて、外国語においてもネイティブと遜色のないレベルでタイポグラフィをデザインできる人も居て改善の兆しが見えつつあります。そういう意味でも、私たちはデザイナーのみを対象とした団体ではありませんが、彼らが作るものが社会に浸透していくことを考えれば意義のある活動をしていると考えています。